

百姓入門記

小松恒夫



人間選書

百姓入門記

小松恒夫



小松 恒夫 (こまつ つねお)

1925年長野県生れ 東大理学部物理学科中退, 同
文学部国文学科卒業 1952年朝日新聞社入社 週
刊朝日, 朝日新聞の編集に携ったのち週刊朝日編
集長在職中に病を得て, 1971年末から畑作りをは
じめる 現在朝日新聞社出版局長付

共著「人間はどれだけの事をしてきたか(科学
編)」(新潮社)「変貌する世界」(現代教養全集
筑摩書房)

百 姓 入 門 記

人間選書34

昭和54年12月10日 第1刷発行

昭和55年2月1日 第4刷発行

著 者 小 松 恒 夫

発 行 所 社団法人 農山漁村文化協会

郵便番号 107 東京都港区赤坂7丁目6-1

電話 東京 (585) 1141(代) 振替東京2-144478

1340-311340-6805

印刷/亨有堂印刷

<検印廃止>

製本/根本製本

© 小松恒夫 1979

定価はカバーに表示

はしがき

雪国の農民が、昔、山の雪形を見て春耕の日取りを定めたように、私は武蔵野の「花ごよみ」に畑仕事を促される。

早春。オオイヌノフグリの鮮かな瑠璃色が畦道でつぶやく。「ジャガイモの芽が動くころだよ。堆肥の用意はいいのかな」

盛夏。トロロアオイの豪華な淡黄と臙脂が土堤から呼ぶ。「暑いからつてなまけてはだめ。ハクサイの地作りはできたの」

初冬。枯れ蔓から垂れたカラスウリの赤が叫ぶ。「霜がもうすぐですよ。早くアカメイモのズイキをとってやらなくちゃ」

疲れが過ぎて病んだおかげで、初めて身に泌みて自然を見る眼が開けた。いつしか野草の声を聞く耳もできたのか。そんな輪廻を重ねること八年。土と人間とのかかわりについて、すこしは思いが深まってきたように思う。百五十坪の畑作百姓に入門した記録である。

目次

はしがき

一章 武蔵野の復讐……………7

新居が浴びた土埃の洗礼 7

猛毒虫アオバアリガタハネカクシ 13

緑を育てたことがない庭の土 21

貧乏人には貧乏人の方法があった 26

二章 レンゲソウとワラの歌……………33

米はあつてもワラはないことの意味 33

“地主の農法”の道はけわしい 41

ようやく確保した一年分の米 47

三章 雪国の村に見たマチの引力……………54

いろりの灰文字は明快だが重い 54

「愛郷心も食えなくなればそれまでだ」 60

越後からかつて帰った鋤と鉋 67

四章 ラッパを捨てて握る鋤……………73

すぐ目の前に「ムラ」があった 73

百五十坪の“小作人”となる 79

冬の天地返しで回復した体力 84

五章 群像・畑の恩師たち……………90

「きみ、それでジャガイモができるかね」 90

「百姓も、土への愛情がものをいうです」 95

「栽培はリモコンながらご指導いたす」 101

第六章 ヒタシマメ戦争一件落着……………106

野菜作りにもある「西医」と「中医」106

梢から見下ろすキシバト夫婦110

せつかくの新案も種苗商に奪われた115

第七章 雑草に注ぐ憎しみと愛……………122

夕日に長い雑草の影122

雑草にもファッションがある129

雑草なみに強い作物の生命力132

第八章 カンピョウ製造顛末記……………141

塩加減は「初霜の降りた程度」141

広いから作れるウリ科地這い作物144

機械ができれば捨てられる道具150

九章 舶来野菜紳士録 157

逆間引きレタスの美味は大好評 157

イタリアのバジリコは日本のシソそっくりか 160

「八百屋にないものもたくさんございます」 164

十章 シマヘビと埋蔵文化財の共存 173

ヘビに選ばれた健康な土 173

金粉つきの瓦硯と釜飯のふた 178

耕さぬ奥さま族と諸先生の農業無視 183

天平の遺物、昭和の遺物 187

十一章 土に学ぶ子らとの出会い 192

祭りで見かけた子どもたちの衰弱 192

盗まれず碎かれるだけのスイカ畑 197

ヒマワリは水色の汗を流す 202

小学二年生が七キロの米を獲った 209

十二章

ヒマワリとナガイモの神秘……………214

それでもヒマワリはまわる 214

豊作祈念祭に舞いこんだ金一封 221

ナガイモのつるがピクピク動いた 226

未完の童話『ながいもの日記』 233

あとがき

一章 武蔵野の復讐

*——新居が浴びた土埃の洗礼

畑作地帯の土を、私はこれほど憎んだことはなかった。その理由は、引越しの日に吹き荒れた強烈な春一番である。

東京といっても多摩地区にある小さな町の小さな借家から、武蔵野を見おろす丘の一角に建てた新居への引越し。その荷物のなかには、借家の庭に仮植えておいた高さ一メートルほどのドイツトウヒがあった。前年のクリスマスに、街の花屋の店頭で、「モミ」だとだまされて買ったものである。引越しのために掘り上げたら、地表から五、六センチ下まで、土は焼きたてのワラ灰のようにフカフカであった。この冬、関東の野山に雨も雪もほとんどなく、土は乾ききっていた。

共稼ぎ夫婦が、忙しい日程をやりくりして引越しと定めた二月二十日、日本海を強い低気圧が東進した。春の気配とともに勢力を増した南海の高気圧が、これに一齐攻撃をかけた。朝のうち、まだ地表に夜露が残っている間は風は空気だけであつたが、昼近くになるとそれは砂嵐に変わった。乾ききった表土は、捲き上げられ吹きとばされ、隙間だらけの古借家に、至るところから侵入してきた。引越し荷物は、たちまち褐色のペールをかぶり、手伝いの人たちの分も含めて、あわてて買ってきたガーゼのマスクは、五分とたたぬうちに、鼻孔のところだけまっ黒な二つの丸がならんだ。晴天というのに、午後のトラック出発時刻には、あたりは薄暗かった。中天まで吹き上げられた砂塵が濃霧のように太陽を隠してしまったのだ。ようやく荷を積み終えたトラックは、ヘッドライトをつけ、新居に向かつてのろのろと出発した。町なみをぬけ、野中の道に出ると、視界はさらに暗くなった。初老の運転手は、対向車との事故を避けるため、たえずクラクションを鳴らしつづけた。「兵隊でね、北支に五年いたがね。黄塵万丈というのはウソじゃなかったな。今日は、まったく黄塵なみだよ」

運転手は助手台の私に語りかけた。目に入った土埃のため、涙を流しつづけていた私は答えた。「中国は知らないけれど、黄砂は家のなかにも入ってくるんでしょね」

私の頭の中は、今夜から住む新居がどうなっているかでいっぱいだった。その前日、一歳半の少女まで動員して、床も階段も窓ガラスも、ピカピカに磨き上げておいたのに――。しかし運転手の

話は無情だった。

「入ってくるなんてもんじゃねえな。まるで砂の洪水だね。あとで、銃の手入れがたいへんだったな」

私は黙って、相変らず涙を拭いながら見えない前方を見守るはかなかった。それから五年後の早春、私は中国を訪れたのだが、この時は幸か不幸か黄塵には逢わなかった。したがって私は、この日以上の砂嵐をまだ経験したことがない。その未曾有の土埃のなかを、トラックは這うように走りつづけ、ふだんなら三十分ほどの行程を、二時間近くかかってようやく新居にたどりついた。

予想したとおり、新居はすべて土に覆われていた。庶民住宅用の軽金属サッシュなど、まだまったく普及していない時代のことであった。棟梁は腕自慢の宮大工で、乏しい予算の割には凝った材料でいいねいに建てたはずであったが、建具とそのまわりとの間には、日本建築特有の、通気のよさを生かす隙間が随所にあつた。その隙間から侵入した乾いた土の微粒子は、昨日磨き上げたばかりの床にも階段にも新雪のように積もり、畳も歩けばくつきりと足跡がついた。曇りひとつなく磨いたはずの窓ガラスから、外はほとんど何も見えず、ガラス戸の棧には吹雪のあとの雪のように、二センチほどの高さに土がたまっていた。新居での私たち家族の生活は、まずその夜、ふとんを敷く平面だけを拭き清めることから始めるはかなかった。

夜半に風はピタリとやんだ。気圧配置は翌日から冬型にもどった。冷たい井戸水を汲んで、家を

拭きつづける日がつづく。そうしないことには家具ひとつ定位置に置くことさえできなかった。雨は相変わらず降らなかった。一週間かかってほぼ清掃を終えたとき、こんどは春二番が襲ってきた。すべてが徒労に帰してまたやり直し。電気掃除機もない時代、私たちは、ただひたすらに雑巾で拭き、土をこすり取る毎日をつづけた。

拭けば拭くほど、こすればこするほど、家具にも床にも、サンドペーパーをかけたように無数の条痕ができた。ほとんどを借金で建てた待望の新居は、私たちがまだ住みなじまないうちに、こうしてたちまち傷だらけとなった。彼岸過ぎごろ、かなりの春雨が降るまで、家の中の土との格闘は終わらなかった。

狭いながらも喜びをもって住むべき新居を、ここまでいためつけた敵陣の所在はどこか。二階のベランダから眺めわたすと、それは足もとからすぐに一面に広がっていた。古多摩川の段丘崖を階段状に宅地造成したこの分譲地を買ったのは、それより四年前の冬の日であった。風のない春のような暖冬の昼。南斜面の陽当たりのよさと、万葉時代「多摩の横山」と詠まれた多摩丘陵まで一望に見渡せる眺めのよさに魅せられて、即日契約したのは何という早計だったか。

眺めがいいとうれしがった眼下の武蔵野の畑作地帯は、あらためて見ると、段丘の下から南方に約二キロ離れた小市街地まで一面にひろがっていた。そのほとんどが野菜畑であることを、四年間にしばしばここを訪れた私は知っていた。早春の畑は、まだ冬眠をつづけていた。わずかに見える

株播きの麦畑を除けば、緑はどこにもなく、黒褐色の裸地は、ことごとく次の南風でわが家を襲う土粒の大軍団であった。

畑の土は、雑木林を切りはらい、崖を削って侵入してきたマイホーム族の人間に、容赦のない復讐を挑んできたのか。それに対抗するには、新来の人間の側はあまりにも無力だった。風が吹けば家を拭く。拭くごとにふえる傷。人間はその傷をながめて畑地の土を呪うほかなかった。自然の執念の底知れぬ深さに気づいたわけではないが、裸地への憎しみのあまり私たちはあたりを散歩する気にさえなれなかった。新居に移っても、地域は、私にとって環境とはなっていないかった。なり得るはずもなかった。畑地憎さという理由のほかにもうひとつ、旧居と同様、新居もまた私にとってはねぐらにしかすぎなかったからである。

*

都心の勤め先まで一時間余という通勤距離は、当時としてはかなり遠い方であった。しかし国電内での五十分は、ことに出勤の際、私にとっては前夜の睡眠不足を補う貴重な時間となっていた。硬派の週刊誌記者という職業のため、取材や原稿書きの深夜労働が絶え間なかった。朝は重い頭で駅まで十五分の道をトボトボ歩き、電車が来て空席を見つければすぐにすわって、次の駅までにはもう眠りこける。そんな都市型生活者にとって、自宅とは、物の面ではどんな環境にかこまれようと、心の面ではその環境から隔絶した、ただひとつの点にすぎなかった。

とりわけ、私が移住したこの年の忙しさは、この職業に入ってから以来、空前のものであった。

引越しの直前には、都心の市ヶ谷へ、「首都防衛」のため初めて配備された陸上自衛隊の実動部隊のルポと性格分析があった。直後には三井三池争議取材のため九州に出かけたのが、途中でプランが変更になって、山口県の徳山でフグ釣り船に乗り、「天下の珍味」とそれを釣る漁師の貧しい生活を書き上げた。そして三月には都内を走りまわって、自動車の排気ガスを測定し、大気汚染を警告した。そのあたりまでは、まだ日常茶飯だったが、四月に入ってから世の中は急に激動し始めた。同僚とともに熊本に飛び、水俣病の徹底ルポをしている間に、ソウルでは反李承晩の大デモが始まり、パリでの米ソ頂上会談のお膳立てもとのつた。国会での日米安保条約審議が難航をつづけている間に、ソ連のミサイルはウラル上空でアメリカのスパイジェット機を撃墜。不穏な国際情勢を反映したさなかに、五月十九日には衆院での日米安保強行採決。翌日からくりひろげられた六〇年安保の大デモ――。

そのほとんどの記事に責任を負わされた私は、武蔵野の畑地のなかのねぐらへ帰ることさえままならなくなっていた。おまけに、七月からはソ連、イタリアへの四十日近い出張も予定されている。ソ連での主目的は、間近に迫ったと予測される人類初の宇宙飛行の準備状況を打診すること。イタリアではローマ・オリンピックの報道が待っていた。海外渡航は、まだきわめて不自由だった時代のことである。気負いの日々というはかなかった。両眼はつり上がり、ひたすらに天下国家から宇

宙の彼方までを見すえていた。

そんな目に、春になってたちまち緑が芽吹き始めた畑地の変貌や、駅までの道に残る雑木林が濃淡さまざまな新緑に彩られた姿など、見えるはずもなかった。見ようとも思わなかった。あれほど気にした家の中の傷痕も、もはやまったく関心の外にあった。家族にとっても、それはほぼ似た状況だったといえる。国会を包囲する大デモを取材中の私は、知人とともに一人ずつ、一歳と零歳のわが家の幼女を抱いて歩いている妻の姿を見つけた。いつ流血を見るときも知れないこんな危険な場へ、乳飲児まで連れ出してきた妻の無暴を、そのころの私は強く咎めようとも思わなかった。

最初は土を敵視し、次いで無視した私たち家族に対して、武蔵野の自然は、この間にひそかに第二波の攻撃準備をはじめていた。自然にとっては、マチにのみ目も耳も向け、ムラを意識しようと思えないこの一家は、排除の対象でこそあれ、同化の対象ではなかったのだろう。第一波は風と土とを総動員して、家屋に対し正面攻撃を加えてきたが、第二波は動物によるゲリラ戦法で、攻撃目標はその家に住むヒトに絞られていた。

*——— 猛毒虫 アオバアリガタハネカクシ

六〇年安保反対運動が、結局の実効はアイゼンハウアーの訪日阻止だけにとどまって、条約は自然承認され、やがてひそかに批准交換も終えたため、日本中がある種の虚脱状態に陥った初夏、家

族が次から次へと奇病に侵されはじめた。

皮膚のやわらかい部分、とくに手足の内側や顔に、ある日突然赤い線状のみみず腫れが起こる。強烈な痛みも、間もなくそれが水疱に変わるのも火傷の初期症状によく似ていた。水疱はやがて崩れ、その部分の皮膚の組織は壊死状態になる。赤い線が現れてからわずか二日ほどで、患部はほとんど全部ぐしゃぐしゃに崩れてしまうのだった。崩れたあとは、痛みに痒み加わる。無心の幼女が掻くと、傷はますますひろがり、しまいには発熱するほどになった。

引越し以来、忙しさにもかかわらず幸い健康で過ごしてきたため、まだホームドクターもさがしていなかった。ようやくたずね当てた近所の女医さんは開業したばかりで、傷を見ても首をかしげるだけであった。その紹介で訪れた隣町の皮膚科医も原因がわからず、気安めのように出してくれた得体の知れない塗り薬は、当然のことながらまったく効き目がなかった。そうこうしているうちに、奇病はひろがる一方で、妻も二人の幼女も顔を何か所もやられ、お岩さんとはこんなだったかというほどの相貌になってしまった。たまりかねて、伝手を頼って診察を乞うた都心の大病院の皮膚科の権威は、初めは「光線性皮膚炎」と診断し、なるべく太陽光線の直射を受けないようにと勧告した。

「そういえばこの家、日当たりがよすぎるわね」

と病院から帰った妻がいった。これまで、あまり太陽に恵まれることのない住居に生活していた